

入園期

「新しく幼稚園に入ってくる幼児にとって、これから続く幼稚園生活は楽しいものであってほしい。子どもたちが、十分満足して遊べるためには、子どもが幼稚園や、友だち同士に早く安定感を持ち、保育者との目にみえない心のつながりをつくることが第一です。そのための入園期における先生と子どもの努力は、他の一、二年にまさるものが必要です」……と語っておられるお茶の水女子大学付属幼稚園の堀合文子先生に、入園期における保育者の考え方、心の持ち方、子どもとの関係などを中心にお話していただきました。

子どもと保育者の心のつながり



堀合文子

一、入園式をむかえるまで

新入園児をむかえて、入園式の次の日からどうするかということですが、入園式の次の日のためには、前もって相当準備が必要です。先生にとっては、入園式をむかえるまでに、大事なことがふたつあります。

そのひとつは、先生自身がどういう心がまえで、新しい子どもを受けとるかということ、もうひとつは、お母さまたちに幼稚園

についてある程度わかっていただくことです。

このふたつが土台になって、次の日からどうするかにつながります。

(1) 先生自身の心がまえ

まず先生自身の心がまえについてですが、先生は前年度の子どもたちとの生活で、その子どもたちにふさわしい先生になっていますので、新入園児の先生になるときには、自分をきりかえて新入園児に適切な先生にしなければなりません。何を準備するより

も、まず、自分を新入園児に適切な先生にすること、これが根本になります。

たとえば、前年度、五歳児のクラスを受け持っていて、三歳児をむかえる場合には、先生は、相当、努力して、自分自身をきりかえなければなりません。五歳児ですと先生と子どもが対等で、お互いによいことばだけで、理解できたり、先生のことばで、子どもが行動することができず、新入園児には、それは不可能なことです。そこで自分自身を切りかえないと、三歳児なり四歳児なりを大きく扱ってしまい、三歳児を三歳児として、接することができなくなります。そして五歳児の程度をきげたような保育になってしまうようなことにもなってしまいます。

先生が子どもの年齢に合わせて、自分自身を切りかえることは子どもにとって重要なことであると同時に、先生にとっても向上する機会になるのではないかと思います。

そこで自分自身を切りかえる方法ですが、三歳児、四歳児を知るために、児童心理の本を読んだりして、発達状態を理解する等の勉強をすることが大切です。ただことばをやさしくする等の形式だけではありません。

知っているつもりでも、もう一度身体的精神的の発達状態を勉強することが、また新しい考えをもつ一つの機会になりますし、新しい子どもに適切な保育を始めるために必要だと思えます。

(2) 両親に話しておくこと

次に、両親に理解しておいていただくことは、幼児教育を大まかにつかんでいただくことです。

・子どもの仕事はあそびである

子どもの仕事はあそびです。あそびを十分して、その中で子どもはいろいろと経験しながら大きくなったり、知識を得ていくのであって、幼稚園では、先生がその場にに応じて指導します。幼稚園は絵をかいたり、歌が上手になったり、字がかかるようになりたりするところではなくて、それは結果的にできるようになるのだということを理解していただきます。

子どもは幼稚園にきたら団体生活の中で、友だち関係の間で、自分を全部出すことが大切です。よそゆきのような態度だとほんとうの教育はできません。赤裸々な姿こそよき教育ができるのです。幼稚園ではまずは自分を出すように指導しますから、お母さんには「お友だちと楽しく遊んでいらっしやい」とひとこといって送り出してほしいということを話します。乱暴もするし、いじわるもするし、いいこともわるいこともみんなして、それでいて、先生がいて、指導します。

お母さんが「先生のいうことをよくきくんですよ」とか「お行儀よくするのですよ」といわれると、子どもは正直ですからよく守ってしまいます。守られると自分を出せなくなりますから、そ

ういうことはいわないでほしいということを話します。

・服装について

幼稚園では、子どもは全身全霊をぶつけて生活しますから、どろんこになってとてもよごれるということ、よごれてもいい洋服で幼稚園にきていただきたいと話します。子どもがどろんこになって帰ってきたら「ああ、よく遊んできたわね」ということばが出るような気持になっていただきたいのです。

・子どもを送る時に

もうひとつは、これは方々に通用するかどうかわかりませんが、この幼稚園では父兄が幼稚園まで子どもを送ってきます。

子どもを送ってこられる時、幼稚園で「うちの子どもは何をしているのかしら?」「けんかしたりしないかしら?」と、心配なこととはよくわかりますが、子どもが幼稚園の生活に慣れて、十分生活ができるまでには一、二週間から一ヶ月もかかりますから、子どもを送って来られたら、「いっていらっしやい」といって帰っていただきたいと話しておきます。子どもが泣いているのを無理にひきはなしたりはしませんが、子どもは、たとえ泣いていても、自分で独立したい気持もありますから、その気持を出せるようにする必要があります。このことも前もって話しておきます。

子どもはお母さんから離れるのが平気でもお母さんの方で心配して子どもについていて、それも、だまってついているのならまだ

いいのですが、子どもに干渉している場合が多いのです。

このようにして、迎える側も準備するし、送り出す側も心があるということになります。新入園児の父兄にお話ししておくことは、幼児教育のほんの入口だけですが、あとは、おおいに、自分の子どもをおして、話し合って理解していただくことになるでしょう。

(3)計画と準備

・家庭と幼稚園の環境の差を少なくする

新入園児は家庭から団体生活に入りますから、環境の差をなるべく少なくして、子どもを自然に無理なく団体生活に入れるくふうをします。そのためには、それぞれの幼稚園の地域によって考えなければなりません。一般論も必要ですが、もっと具体的に新入園児について考えることが必要になってきます。子どもたちが家庭で生活している環境について考え、そこで動いている子どものことを考えます。遊び場所もなくて、家庭の中にとじこもっている子どもが多ければ、家庭の中のように近づけて保育室を準備することになります。

たとえば試みとして、次のようなことをしましたことがあります。

三歳児を迎える時でした。学校形態にはまず机といすがありますが、家庭では部屋いっぱい机といすがおいてあるということ

はありませんので、子どもにとって、抵抗があるのではないかと
思い、机とイスを少しだけおいて、床を広くしてみました。この
ようなことから考えてみる必要があるのではないのでしょうか。
子どもが生活している場面について、こまかく想像してみた
り、考えたりすることは、準備であると同時に、こまかい計画だ
と思います。具体的にこまかく考えることは子どもにプラスにな
るのではないかと考えます。

家庭と幼稚園の環境の差を少なくすることについて述べました
が、なぜ環境の差を少なくするかといえば、子どもにはいろいろ
な性格の人がいます。すらすらと入れる人もありますが、敏感で気
になって自分の活動ができない人もあります。子どもが自分の活
動ができるためには、活動しやすい環境をつくっておくことが必
要です。子どもが幼稚園に来た時、先生も努力しますが、その前
に家庭と幼稚園の環境の差を少なくしておくことも大切です。

子どもが幼稚園に来たら、その時は、何の先入意識をも持たな
いで、幼稚園の中で活動している子どもを見ていくことになりま
す。

・遊具について

どのような種類の遊具をおくかということですが、初めのうち
は家庭で子どもたちがつかっているような遊具をわざわざおきま
す。たとえば動力の遊具、線路のあるものなどです。「あっ、う

ちにある、じどうしゃ」といって、子どもが親しみを持てるよう
にするためです。しかし、このような種類の遊具は将来まで長い
期間にわたってそのままおくのではなくて、子どもたちのようす
をみて、適切な時期にとりのぞきます。いつとりのぞくかは、子
どもたちの状態をみて、たとえば一学期は出しておくと、二期
からはとりのぞくというような配慮が必要です。線路を例にとる
と、子どもたちがつみ木でどんどん線路をつくれれば、その時は、
もう、できあがった線路は必要ではありません。

やはり、遊具の種類についてですが、ブロックなどいろいろな
種類がありますが、初めのうちは、その中の一種類だけ出してお
いて、子どもたちが慣れてきたら、そこへ、また加えていくとい
うことになります。

次に遊具のおき方ですが、今までいかにもつかっていたような
状態にしておきます。ままごと道具でも、わざわざごちそうを茶
わんにのせておいたり、絵本も本棚から出して広げておいたり、
つみ木も箱から、ばらばらと出しておいて、自分が出してくるの
ではなく、いじれば、すぐに、つかえるようにしておきます。
「あ、楽しそうだな」「あそびたいな」というふんい気を出して
おくのです。

このような準備がなされ、子どもは幼稚園にきます。

二、新入園児をむかえてから

(1) 先生の行動

・子どもたちの名前をおぼえる

先生が子どもたちの名前をおぼえて、入園式の日には子どもの名前を呼ぶことは大切なことです。ただ名簿でずらずらと呼ぶのではなくて、努力して一日で覚えてしまいます。これが先生にとっても便利だし子どもと先生とをつなぐ一つの大きな手段にもなります。先生が子どもと会った時に子どもの名前を呼ぶことは大事だと思います。子どもはふしぎなもので、名簿でよばれたのところが、先生に、自分の名前を呼ばれることは、あしたからが楽しいわけです。「自分の名前を先生が呼んでくれたと聞いて、とてもよろこんでいました」というようなことをお母さんからきくともありますが、名前をおぼえておいて、子どもの名前を呼ぶことは重要なことでしょう。入園式の翌日からのあそびの中でも、子どもたちの名前を呼ぶことは大いに活用することになります。

・朝のむかえ方

朝、子どもたちをむかえるときの大切さは子どもたちが入園してから一年たっても、二年たっても同じですが、子どもたちが幼稚園に慣れるまでは、特別に大切です。ひとりひとりの子どももていねいに、にこやかにむかえて、そこから個人個人の指導がは

じまります。「おはようございます」とにこやかにやさしくむかえて、そのむかえのいかんによって、その子どもの一日が楽しくもつまらなくもなるといって過言ではないくらい大切です。特に入園時は先生のむかえ方により、泣きたくも泣けないでしらずにあそんでしまうという例もあります。次の瞬間は、もう、団体生活に必要なことがらに入っていきます。朝、幼稚園に来ると、手を洗うことと、うがいをすることがありますが、入園式の翌日は子どもは何も知らないで幼稚園に来ますから、先生は「くちやん、おはようございます」とむかえ「手を洗ってきましようね」といって、子どもといっしょに水道のところに行きます。

子どもが自分で手を洗える子には「洗ってね」といえばよいのですが、自分で手を洗えない子どももいますから、その時は、先生が水道の蛇口をひねります。そうすると、手を出して洗い出す子どももいます。しかし三歳児ですと、蛇口をねじっても、洗わない子もあります。その時は、先生が自分の手を洗ってみせる時もありますし、その子どもの手を持って洗うこともあります。手を洗うことひとつをとってもその子によってちがってきます。で、このようなことは何でもないことのようにですが、次の活動が順調にいづくことにつながると思います。表面的には何でもないとかもしれませんが、精神的にはずいぶんちがってきます。子どもがふたりいっしょにくればふたりいっしょにしますが、三十五

人いれば三十五回するような気持ですることが必要です。

手を洗い、うがいをすませた次の瞬間にはあそばせるといふことがあります。先生がいっしょにあそぶのですから、先生はどてもいそがしいのです。一方では登園してくる子どもをむかえ、もう一方ではすでに登園している子どもをあそばせます。入園当初は、ひとりひとりばらばらで、グループはありませんから、ひとりひとりの子どもに話しかけます。先生がだまってしまおうと子どもの生活に穴があきますので、本を見ている子どもがいれば、手を洗に行く通りがかりでも「あら、おもしろいものがあるわね」といって通ります。

入園当初の一週間は先生は一日中しゃべっています。先生が一日中しゃべっていて、子どもたちは、みんな忘れられていないというところで、気持ちもまぎれ安心感や安定感を持てるのでしょう。だまってしーんとしたり間があくと、入園時は家が思い出されたりして、泣かなくてもよい時に泣いたりすることにもなりかねないので。

よく話す、話しかける、間をあげないことが一つのこつでしょう。

子どもの中にはしぶしぶしてあやしい子と活発に活動していても時にはあやしくなる子もあります。入園当初のものはその本来のものどちがってあらわれている場合がありますので、この点

も子どもたちをみながら先生は判断していくことになります。

活発であやしい子のために、保育室が玄関に近いような場所にある時は、保育室の戸をあけておかないで閉めておくこともちよつとした注意になるかもしれません。

このようにして一週間くらいたつと、子どもは幼稚園の生活に慣れてきて、子どもの活動がどんどん出てきますから、子どもの活動範囲もひろがって、子どもがあちこちで自分の活動を楽しみはじめます。

朝、子どもが保育室に入ってくる時のようすをみると、さあつと入ってくる子と、しぶしぶ入ってくる子があり、それぞれ程度があります。さつと保育室に入ってきて自分から活動できる子と、しぶしぶしてあやしい子を見ぬくことが大切です。しぶしぶしてあやしい子は先生が手をひいて離さないようにします。

それで子どもは安定感を持ちますが、手をつないでいるだけでは足りなくて、なんだかんだごしょごしょと話します。あやしい子が多いときは「あなたここにつかまってね」「あなたはここね」と先生のあちこちにつかまらせませす。あやしい子たちだけにかまけてはいられませんから、どこへでも連れて歩くことになります。

次の日も、同じようにします。そのようなりかえしが一週間く

らい続くでしょうか。ある日、ふっと、子どもが自分から活動しはじめます。

・先生の居所をはつきりと子どもたちにわかるように話す

子どもの活動が活発になり、子どもが保育室から庭に出かけるようになった時には、「先生はここにいるから、ここに帰っていらっしやいね」と話します。保育室でも何人かの子どもが遊んでいるし、庭でも子どもが遊んでいて、先生が、庭に出ていく場合には、保育室にいる子どもに「先生は庭の〇〇へ行ってくるわね」と話してから出かけます。その間には、お手洗いにいきたい子どももでてきますから、「先生は〇〇ちゃんとお手洗いにいくつてくるわね」というように行き先をはつきりして出かけます。

子どもが出かける場所は危険がなくて安全な場所であること、先生の居所がわかり、帰ってくる場所がはつきりとわかっていること、先生は子どもの行き先を知っていることなどでお互いに安心して活動できます。しかし、不安で先生につかまっている子もいますから、先生はそういう子ははなさないで連れて歩きます。

このようにお互いに「行ってくるわね」とか「行ってらっしやい、先生はお部屋にいるから、用事があったら呼んでね」等と話すことによって、一対一の信頼感を持てるようになるのです。

・子どものせわ

幼稚園での子どもたちのあそびの種類や経過をみるとこれは時

代がかわつてもだいたい同じようです。

入園当初にも関係しますが、まず「おもちゃの移動」があります。入園式の翌日から子どもたちがおもちゃを移動する場合があります。おもちゃのおいてある場所からおもちゃを運び出して、別の場所にあつめるのです。子どもたちは、「しょうぼうしゃ」だとか、「おひっこし」とかいています。次に「砂あそび」のようなものがあり、「おままごと」があります。おままごとはこのころでは内容がだいぶかわつてきて、「おいしゃさんごっこ」「ちゅうしゃ」です。次に「ねごっこ」や「犬ごっこ」があり「おひめさまごっこ」「ようちえんごっこ」になります。それから、いわゆる小学生がしているようなゲームで「わらべ歌」「人工衛星」等があります。その間にその時代にはやっている「ウルトラマン」とか「サインはV」等がはいつてきます。こうしたあそびは、だれも教えるわけではなくて、自然に出てくるもので、ふしぎなことです。

子どもたちがある程度幼稚園に慣れてくると、子どもが安心感を持つてきますからいろいろな活動ができます。友だち関係もできてきますから、子どもたちは、子どもたち自身とても楽しく活動します。友だちといっしょにあそんで楽しくなるとめちやくちやのあそびになって、いわゆる「おひっこし」がはじまるし、人

形はほうり出すということになります。楽しさのあまりに、いわゆるめちゃくちゃ式のあそびになります。このようなあそびはあつる程度はやらせますが、折をみて、「お手つだいさんになりましたよ」といって掃除したりして、あそびというものを幼児があそびの中で考え、創造できる余ゆうのあるあそびにすること、それには、次第にめちゃくちゃでなく道にのつたあそびにする必要があります。

また砂場のあそびがさかんになると、エプロンはよごれる、くつ下はよごれると大変なさわぎになります。ある程度は、まくったり、はさんだりしてあそびつづけますが、あまりどろんこになった時にはとりかえてあげます。そして、よごれた衣服を洗たくします。子どもたちがあそべるようになると、先生にくつついている人が少なくなってきましたから、手のあいている時には、洗たくする時間はできてきます。洗う時間がない時には放課後洗います。「先生、洗っておいてあげるわ」と子どもに話しておきます。これらのように子どもは、自分の世話をしてもらおうと自分のエプロンを洗ってくれたということでも、先生に対する信頼感や心と心のつながりがめばえるのではないのでしょうか。

・ いわゆるあそぶこと

子どもと先生がお互いに親しみを持つためのひとつに先ほど子どもの世話をあげましたが、もうひとつ大切なことがあります。

それは、いわゆる子どもと先生が、あそぶということです。その子どもの、その時によってちがいますが、子どもと先生があそぶことによって子どもは次の段階にすすんでいきます。

この先生と子どもがあそぶということは、ただつみ木をつむとか、絵本を読んであげるということではありません。いつ機会があるか、どんなあそびになるかはわかりませんが、必ずその機会があります。このあそびはいろいろな種類がありますが、たとえば、馬になって床をはったり、子どもをおぶって走りまわったりするので、子ぼんのようなお父さんがするような種類のあそびでしょう。このようなあそびをすると、それまでこわい顔をしていた子どもがきゃっきゃっといつてよろこびます。そして、子どもの気持がほぐれてきます。

子どもはおもしろいもので、このようなあそびをすると、それを見ておとなをけいべつするようなわらいをしたり、自分もやってみてみたいと思ったり、そうかといつて、おんぶされるのははずかしいと思ったり、そこにはいろいろな心理があります。

このようなあそびの瞬間のうごきは、教育的でも何でもないようなことなのですが、大切なことです。

しかし、たとえ子どもをおぶって走りまわっても、かわいがつておぶうとか、または、からかう意味でおぶうのは、たとえ身体がふれあつても、それは何の役にも立ちません。

ひとりひとりの子どもについて、試行錯誤していきます。

このようにして子どもたちの活動がはじまりますが、きょうは子どもたちが割合あそんだな、はわたしもいっしょにあそべたな、と思う日もあるし、きょうはあまりあそべなかった、お手洗いと保育室を通うのに一日をすごした、と思う日もあります。

きょうは子どもの世話でいそがしくしてあそんであげられなかったという日もあります。ちょうど、親がいそがしくしていかまってあげられなかったのと同じような状態になることもあります。そうすると、かえって、子どもがよくあそんでいて、あらと思うこともあります。

ともかくそのころの毎日は平たんではなくて、まして、きのうのあそびが、きょうにつづくということはありません。子どもがあまり遊ばなかったり、泣く子がいたり、かと思っていると翌日はけろりとして、今まであそんで安心していた子が泣く日もあったりと、よくあそんだりあそべなかったりのくりかえしが一ヶ月くらいつづくでしょう。もちろん、何かしようということはありますが、子どもが、毎日楽しくあそんでくれればいいということです。

はじめのうちは子どもたちがあそんでいてもひとりひとりばらばらにあそんでいます。日がたつにつれてふたりであそぶようになってきます。そのころの毎日は一日一日とかわっていきます。

はじめのうちはみんなの中であそんでいるように思えた子の中に、一週間くらいたった頃、子どもたちの活動がどんどんでてる頃に、慣れにくい子どもが、はっきりとしてきます。そこで先生はそのような子に集中して、あそぶということになります。

自分の活動を出しにくい子どもは自分でじっくりあそびにとりくむことができませんから、他の子どもにおくれるばかりでなく、生活に穴があきます。あそべないから幼稚園がつまらなくなっているやになり家の方がいいということになります。これはとてもこわいことです。こういうことにならないために、先生と子どもがあそぶということはとても重要なことです。

子どもどうしの友だち関係ができればじめると、子どもどうしの直接の交渉が重要ですので、そのときはまた、先生はいろいろと試行錯誤することになります。まずはじめは、先生に信頼感を持ってもらうことが大切で、そのために子どもの世話をすると、子どもとあそぶことが大切な一つとなります。

そして先生は自分でやったことに対する子どもの反応を感じて先生も成長していくことが必要です。数年同じくりかえしではなく、毎年入園する幼児はちがうのですから保育もちがってこなければならぬのは当然でしょう。

常に教師が勉強し研究してこそよい指導ができると思います。

(編集部)